
[6] 畿内周辺

鋤柄俊夫

①……………伊賀(三重北西部)

食 膳 具

土師器手捏ね皿，同高台付き皿，土師器ロクロ皿・杯，土師器碗，黒色土器碗，瓦器碗から構成される。ただし土師器皿は中世Ⅱ期まで，瓦器碗は中世Ⅲ期までを中心とし，Ⅳ・Ⅴ期については資料数が少ないために不明な部分が多い。浮田遺跡の整理によれば〔三重県教育委員会1990〕，手捏ね土師器皿は，11世紀後葉において「て」字状口縁の皿と，体部に段をもって外へ開く形の京都と同様な製品がみられる。しかし後者についてはその後，明瞭な面取り口縁を形成することなく，中世Ⅱ期的な皿形態へ変化していくものと考えられ，また主流は小皿とされている。

高台付き皿は古代後Ⅲ期～中世Ⅰ期でみられ，端部を折り返した特徴的な器形を呈する。ロクロ成形の皿と杯は詳細な時期を決定することができないが，中世Ⅰ期の中におさまるものとする。黒色土器は大門遺跡〔三重県教育委員会1984〕・森脇遺跡〔三重県教育委員会1991〕・突帯付き碗の見える浮田遺跡〔三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1991〕で知られ，森脇遺跡の整理によれば，平らな底部から屈曲して外上方へ立ち上がるものと内彎気味に立ち上がるもの，および後者の器形で器高の低いものがあり，法量的には大小の別があるとされる。

なお年代は共伴する灰釉陶器から10世紀中葉と考えられている。また上野市大門遺跡のSK9からは，土師器皿・杯など5点と共に土師器高台付き碗が1点出土している。おそらく墓と考えられ，概ね伏せられた状態での出土とされる。

瓦器碗は，山田猛〔山田1986〕・和氣清章〔和氣1992〕を代表として，上野市岸之上遺跡〔三重県教育委員会1984〕・名張市滝野氏城址〔名張市遺跡調査会1986〕などでも整理が行われている。山田によれば，その出現は11世紀第2四半期以降で，消滅は14世紀代，変遷としてはおよそ13世紀の初頭までは大和型の範疇に含まれるが，それ以降は独自の特色を示すとされる。その特徴は，「浅い碗として矮小化するという一般的な傾向に加えて，口縁部外面のヨコナデと体部外面の指圧痕が目立つ。また口縁端部の沈線や高台は比較的遅くまで残る。体部外面のヘラミガキは一般に省略される。」また「底部内面のヘラミガキはラセン文を主としており，体部内面のヘラミガキとは別に施される」点などである。

なお，伊賀町西沖遺跡〔三重県教育委員会1990〕では内底面に菊花状のミガキを施した瓦器碗，上野市才良遺跡〔三重県教育委員会1990〕からは高台がハ字状に外へ開く黒色土器と，SD25から山

図1 伊賀(1)

図2 伊賀(2)

田編年のⅠ段階Ⅰ型式を示す瓦器碗，上野市岸之上遺跡では高台が二重になった瓦器碗が出土している。

煮 炊 具

近江・大和・伊勢の影響を受けた製品が混在する。古代の系譜をひくものは、丸胴で口縁部を外折しただけのいわゆる「L」形口縁の鍋であり、古代後Ⅲ期～中世Ⅰ期でみられる。中世Ⅰ期からはこれに加え、内傾する頸部と、外折した後、端部を内側につまみ上げる大和型の土師器釜がみえ、さらに中世Ⅰ期後半頃からは、おそらく長胴形で口縁部が直立するか、やや膨らむ形をもった釜が現れる。

しかしこの状況は概ね中世Ⅱ期で終結し、Ⅱ期後半からはまた別の系統が現れる。その第1は伊勢型の鍋であり、Ⅲ・Ⅳ期の資料が不明であるが近世までの搬入がみられる。第2は箱型の体部に外折する口縁部をもった瓦器鍋である。この製品は口縁端部をわずかに内側に突出させる特徴をもち、その形態は京都の瓦器鍋の口縁部に類似する特徴をもつ。

後述するように、京都の鍋に比べ近江の鍋が体部を箱型にしている状況を考慮すれば、当該製品についても同様な系譜を考えることが可能であろう。また瓦器碗の衰退時期に対応する形で瓦器中型品が現れる状況は京都を除く畿内の共通の傾向である。

出土状況としては、澤田遺跡〔三重県教育委員会1990〕からはL形口縁と京都的な受け部状口縁の中間形態を示す瓦器鍋が出土。上野市大門遺跡のPitBからは、瓦質鍋が半分に分断され、その破片が重なった状態で出土した。口径は29.8cmで平らな底部と直線的に立ち上がる体部をもち、口縁部は短く外折し、その端部はわずかにつまみ上げられ、内面には刷毛調整が施される。また上野市浮田遺跡では大和型の土師器釜，瓦器碗，山茶碗，伊勢型鍋，土師器皿などの分類と編年を行っている。

定量として、上野市岸之上遺跡〔三重県教育委員会1984〕SK1では瓦器碗は推定の最少個体数が137，他に瓦質土器鍋（口径20.4cmで平坦な底部から内彎して立ち上がる体部と外折する口縁部から構成される。）が1，土師器皿が55，土師器釜（口縁部が内傾する頸部からく字状に外反し端部を内折するもの）が4である。なお、瓦器碗は川越の大和型第Ⅰ段階D型式（11世紀後葉）で、大山田村西沖遺跡SE66に先行し、伊賀町的場遺跡，上野市上寺遺跡SK16に続く時期とされる。

また上野市馬場遺跡〔三重県教育委員会1982〕では、破片数で瓦器碗493，瓦器皿17，瓦器不明262，土師器碗1，土師器皿78，土師器釜28，土師器鍋14，土師器不明345，瓦器鍋2，山茶碗4，東海系播鉢4，信楽窯播鉢10，渥美窯甕1，陶器不明41，天目碗7，瀬戸窯播鉢6，瀬戸窯鉢1，美濃窯播鉢12，美濃窯その他31，青磁碗13，青磁皿1，白磁碗1，合計1372点出土している。

またほかに大山田村風呂谷遺跡〔三重県教育委員会1984〕からは、土師器伊勢型鍋と瓦器受け口形鍋，土師器へそ皿，瓦器花瓶，石臼が出土している。

中世ⅡからⅢ期への段階で画期が求められそうである。

②……………近江(滋賀)

食 膳 具

通有にみられる製品としては土師器皿・黒色土器碗・瓦器碗があり、これに在産の陶器として近江系緑釉陶器が加わる。堀内明博〔堀内1986〕・森隆〔森1986・88〕による編年研究がおこなわれている。

土師器皿は湖西でみられるロクロ成形の製品と湖東・湖南でみられる手捏ね成形の製品がある。また10世紀後半段階までにおいては、他地域同様に湖東地域においても須恵器杯の系譜を引くと思われるロクロ成形の皿および高台付きの杯がみられる。手捏ね成形の皿についてみると、10世紀後葉以降京都の影響を受けた同形態の皿がみられ、12世紀～13世紀における京都型皿と在産型皿および再び京都型皿の出現をみることになる。

近江独自の特徴は、京都型の中でもいわゆる白色系と呼ばれる杯形の製品にみられ、小型器にも在産の特徴は求められやすい。一方で普通サイズの皿については京都型の範疇に含まれたまま時代を降るところとなる。

黒色土器は、11世紀は流通が少なく、12～13世紀前葉にはいるともっとも多く流通する。13世紀中葉以降14世紀代はその終盤期である。その傾向と土師器皿にみられる京都型との関わりをもって両工人を同一とする見方もあったが、後述するまでもなく、土師器皿にみられる京都型と在産型の流行の変遷は、広く列島に共通する傾向であり、その結論の正否は別にしても、その根拠を黒色土器の動向に結びつけなければならない状況には至っていない。

瓦器碗については蒲生堂遺跡で焼成土坑が検出され、同地域を中心とした近江型の生産と流通が行われていたことが明らかにされている。

煮 炊 具

木戸雅寿による整理が知られる〔木戸1989〕。古代後Ⅲ期は球胴で口縁部を外折するものと、直線胴で口縁部直下に鏝を巡らすものがみられる。古代後Ⅲ期後半から中世Ⅰ期の状況は不明な部分が多いが、中世Ⅱ期以降、釜4種、鍋2種以上の煮炊具がみられる。鍋は受け部状の口縁部をもち、体部はやや膨らみ気味で立ち上がる(図3-24)。中世Ⅲ期も同様な形態をとるが、Ⅳ期には体部が直線的に外上方にのび、口縁部は外折し断面が三角形を呈する。基本的に京都型鍋に近いものと思われる。中世Ⅳ期後半以降は平底で体部の直線的な受け部状口縁の形態が再び現れ(図4-17)、Ⅴ期は口縁部の屈曲が段状に変化して続く。

図3-32・33は半球形の体部に低い段状の突帯をめぐらすものである。Ⅲ期後半以降、口縁部は内傾し、突帯も失われる中で、Ⅴ期以降は器高が減少し、口縁部を内側へ折り曲げた焙烙状を呈する製品となる⁽¹⁾。

釜は京都型釜との類似点が多い体部の直線的なものと、球胴形で口縁部の内傾するものに分けられ、後者はさらに足釜および足の付かない2種に分けられる。図4-7の系列は、やや扁平な球胴形を呈し、口縁端部は丸みをもって仕上げられる。鏝は短く断面三角形を呈する。図4-4の系列は前記釜より器高の高い球胴を呈する。鏝は同様に短く断面三角形を呈するが、口縁部は内傾しながらも長くのび、外面に段をもち、端部は肥厚しておさめられている。後者は中世Ⅰ期後半にその初現があり中世Ⅲ期まで続き、前者はⅡ期後半からⅣ期前半でみられる。したがって煮炊具にみら

图3 近江(1)

図4 近江(2)

れる画期は中世Ⅰ期とⅣ期に考えられよう。

③……………京都

食 膳 具

平安時代後半以降室町に至る京都の土器研究は、1975年に平安京調査会がおこなった左京四条一坊の調査によって出土した、「寛治五年」銘の東播系播鉢の整理とともに始まる。これ以降、同志社大学校地学術調査委員会、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、京都府教育委員会、(財)古代学協会、京都大学埋蔵文化財研究センターなどにより、それぞれの調査成果を基にした編年案が出され、それは現状において、細部の相違はあるものの、おおむね共通の認識にある〔鋤柄1988・1994〕〔伊野1987・1989〕。

古代後Ⅲ期は、いわゆる平城宮の杯形態が変化し、体部が傾斜を緩め、口縁部をS字状に屈曲させ、口縁端部に短い内折調整を施したものであり、およそ10世紀初頭頃を下限とされる平城宮「続SD650B」に比定される。この時期を実年代で対照できる資料は、天曆七(953)年の墨書をもつ緑釉陶器を出土した平安京右京二条二坊SX01、天禄四(973)年に焼失した薬師寺西僧房床面出土の土器群であり、いずれも杯は体部が外斜して口縁部は丸く調整が施される。

またこの時期から11世紀への過渡期の特徴であるが、図にみられるように、口縁端部の短い内折の消滅と、継続する外反ぎみの体部形態および二段以上のナデ調整がある。薬師寺西僧房床面出土の土器群にはこれがみられず、西僧房床面出土の土器群に後出するが、10世紀の中におさまるとされる薬師寺SE048では口縁端部の内接を縮小する資料がみられ、この傾向は概ね前者が内膳町遺跡のSK19に、後者が同SK18の段階に対応させて推定できることになる。なお内膳町遺跡SK18は、958年を初鑄とする乾元大宝をもとに1000年前後の時期が推測されている。

中世Ⅰ期は、寛治五年(1091)の墨書須恵器を共伴した平安京左京四条一坊SE8掘り方の淡緑灰色砂出土の資料および、(財)古代学協会が調査した押小路殿遺跡の、11世紀中葉の和泉型瓦器碗が共伴した土器群が知られている。皿の形態は、口縁端部を外反するものと、上方へ立ちあげて断面を方形にするものから、面取りを加え、体部外面に2段のナデ調整を施すものがみられる。

中世Ⅰ～Ⅱ期は、烏丸線内遺跡のNo.34焼土層Ⅱが、仁平三(1153)年四月十五日(本朝世紀・百鍊抄ほか)、平治元年(1159)十一月二六日(百鍊抄ほか)、治承元年(1177)五月六日(百鍊抄・玉葉ほか)いずれかの焼亡記事に対応すると考えられており、参考資料となる。

同様に内膳町遺跡の井戸SE176では、火災にあった土器群と洪水層と考えられる暗灰色混礫層を、土御門内裏の康治二(1143)年の内裏浸水記事および、大治五年(1130)または久安四年(1148)の焼亡記事と対応させて考えられており、やはりこの時期に対応する。中世Ⅱ期の土師器皿は、口縁端部外面の内傾した面取り調整が発達し、端部は尖りぎみに仕上げられ、やがて面取り状調整の特徴である外面の稜が失われ、丸く仕上げられる。またこの時期のおわりに白色の杯型の皿があわられる。この皿は、丸みをもった底部と内彎気味に立ち上がる体部から構成され、口縁部は横ナデにより尖りぎみに直上方向へ仕上げられる。

中世Ⅲ期の土師器皿は、体部の外反形態を特徴とし、口縁部は外面を丸く仕上げて端部を直上方向へ尖らせている。体部は外斜して調整の省略化が著しい。一方白色の皿は、体部が直線で口縁端

図5 京都(1)

部外面が丸みを帯びた面取り状に成形されるものから、口縁部内面に凹線を巡らせて、つまみ上げの形態が明確になると同時に、体部が外反気味に立ち上がり、底部との境界が明瞭に認められるものがみられる。

中世Ⅳ期はこれまでの皿の系列にかわって、Ⅱ期に出現した白色系および、その延長上にある淡い褐色系の皿が主体となる。形態は、これまでの杯型から皿型へ移行し、体部の断面形は体部上半のヨコナデを強調することによる口縁部および底部際の薄い紡錘形を呈する。体部の形態は、底部から内彎して立ち上がる下半部と、外反ぎみの口縁部およびつまみ上げによる端部の成形で表現される。

この傾向は、中世Ⅴ期から近世Ⅰ期へもつながり、特に中世Ⅴ期の中で、天文元年（1532）に焼打ちされた山科寺内町遺跡の石室Ⅰ～Ⅳ出土資料は、13世紀以降に欠けていた実年代資料として重要な位置におかれている。なお、中世Ⅴ期から近世Ⅰ期へは、口縁部のつまみ上げが消滅する傾向で整理することになる。

また、同器種のみでの変化期としていくつかの時期が比定できるとするならば、第1の段階は2段ナデを失い、白色の皿が出現する13世紀前半、第2の段階が平安時代以降続いた皿の消滅期である14世紀前半、第3の段階は白色系の皿が杯形から皿形へ変わる15世紀前半である。

煮 炊 具

当該資料の整理に関しては、すでに宇野隆夫・菅原康夫・菅原正明・浜崎一志によっておこなわれ、土釜・土鍋の分類と変遷の傾向が示されている。

中世京都における当該製品は、瓦器中型器として畿内でも最も古い段階に出現する器種である。その成形は両者共に粘土紐の輪積みによるものであり、調整は口縁部に横ナデが施され、体部は内面が横位のハケ調整で、外面は粗い指押えが残るのみである。

土釜は大別してA（有脚のもの）・B（口縁部の内彎するもの）・C（口縁部の直立して短いもの〔Ⅰ〕と長いもの〔Ⅱ〕）の3種に分けられるが、ここでは13世紀以降の長期間にわたり認められる土釜CⅠと土鍋を中心にみていきたい。

古代後Ⅲ期から中世Ⅰ期の古い段階の煮炊具は、基本的に長胴型の罏甕と球胴型の小型甕に分けられる。前者は口縁部直下に短い罏をまわすもので、胴部外面のタテハケを特徴とする。後者は短く外折する口縁部を特徴とし、口縁端部はさらに内側につまみ上げるか、折り曲げる形態をもつものもみられる。

中世に盛行する土製煮炊具は、中世Ⅰ期の後半期にあらわれる。土釜A・Bおよび、前代の罏甕に近い、土釜CⅠの祖形的な製品の3種である。またA類については、法量が小さく成形の丁寧な小型品もみられ、胴部最大径の位置、頸部の形態などにより、中世Ⅲ期までの変遷をみることができる。

土釜CⅠの変遷の特徴としてまず口縁部は、直立して端部断面が方形のもの（中世Ⅱ期）から、口縁部上面のナデにより内外端部が発達し、さらに内端部がつまみ上げられる形で伸び（中世Ⅲ期）、やがて口縁端部上面は内傾する平坦面をもって短く成形されるものとなる。また罏部はそれまでの断面方形のものから台形状に変化し、小型化する。

土釜CⅡはおよそ15世紀以降にみられる製品であり、同時期にみられるCⅠと比較して口縁

図6 京都(2)

部・鏝部がより長い。変遷の傾向としては、口縁部上面を内傾させたものから口縁部断面が方形を呈するものへたどれるものとする。

土鍋は中世Ⅱ期が、胴部下半に最大径をもち、内彎する体部から外上方へ折れる受け部と、短く立ち上がる口縁端部を特徴とし、Ⅲ期は胴部最大径の位置が上昇し、口縁端部の発達に対応して受け部の屈曲は鈍いものとなる。Ⅳ期は体部が直線化して、丸みを帯びた底部との境界に明瞭な稜を形成する。また前段階まで受け部外面にみられた屈曲の稜はほとんど失われ、口縁部は胴部から直接外折して成形される形態を呈する。なお端部は断面が三角形状に発達する。

Ⅴ期は体部の傾斜が進み、形態的な断絶も推定されるものであるが、浅い焙烙状の製品となっている。

煮炊具において中世Ⅰ期とⅣ期に画期がみられそうである。

①……………大和(奈良)

食 膳 具

瓦器碗，土師器皿から構成され，稲垣晋也〔稲垣1960・1961・1963・1968〕，田中琢〔田中1967〕，白石太一郎〔白石1969〕，川越俊一〔川越1983〕の研究を前提として，最近は中井一夫〔中井1988〕，竹田政敬〔竹田1987〕，森下恵介〔森下1987〕，近江俊秀〔1990a・1990b・1991・1992a〕，北野隆亮〔北野1991〕らによって焼成・分類の再検討と機能的な考察がおこなわれている。また奈良市内の状況については森下恵介・立石堅志〔森下・立石1986〕〔立石1989〕，天理市内の状況には布留遺跡〔埋蔵文化財天理教調査団1985〕の整理が，他に稲垣晋也による法隆寺出土資料の検討〔稲垣1962〕，伊藤久嗣による元興寺出土資料の検討〔伊藤1968〕を緒とし，坪之内徹〔坪之内1990〕，森下恵介〔森下1987〕，今尾文昭〔今尾1990・1992〕，川口宏海〔川口1990〕，近江俊秀〔近江1992b・1994〕による火鉢と中世後期土器の整理がある。

瓦器碗の基本的な変化は，法量の減少と調整の省略によって示される。この傾向は，特に中世Ⅲ期に入るところから顕著となり，器形は器高の高い，高台の退化したものとなる。なお天理市の在原遺跡〔天理市教育委員会1988〕などでは体部下半に突帯を巡らせた托付き型の黒色土器碗がみられる。

土師器皿は基本的に京都型皿の影響下にある。その傾向は2段ナデの省略と体部の形態の変化を共通のものとして中世Ⅲ期まで続く。一方中世Ⅲ・Ⅳ期は京都を意識しつつも在地の特徴ももった手捏ね皿をみるようになる。30は体部下半を強い指押さえ，口縁部を直線的に外上方へのばす同時期の京都型皿に対比されるが，これ以降はその特徴を減少させ，口径の小さい杯形を呈する。同様に33も京都における白色系土師器皿に対比されるが，これ以降皿形に転化することなく続く。小皿についても体部下半を強い指押さえで成形するタイプに類似し，いわゆるヘソ皿（手捏ね成形による白色系の小型品。底部を上方へ突出させた特徴的な形態をもつ）はみられない。Ⅴ期においてもこの状況は続き，大和独自の在地系土師器皿をみることになる。

なお榛原町の野山遺跡群両徳寺地区 SX01からは伊勢型の土師器皿が出土している〔奈良県立橿考研1985〕。

図7 大和(1)

图8 大和(2)

煮炊具

基本的に土師器製品が主流であり、球形の胴部から口縁部を外反させ、端部をさらに内側に折り曲げた器形（2・3など）および、球形の胴部と内傾する口縁部の端部を外へ折り返す形態（9・10など）を軸とする。古代後Ⅲ期においては、体部は直線的に内傾して立ち上がり、口縁部は短く外折する。罌は水平に付けられる。中世Ⅰ期は外折した口縁部の端が内側へ巻き込まれる形で仕上げられ、体部は球形となる。中世Ⅱ期では罌はやや上方へ傾いて付けられ、口縁部は内側に沈線を巡らせる。またこの時期、河内系の釜（5・6・7？）および口縁端部を外へ折り返すタイプがみられる。

中世Ⅲ・Ⅳ期は、口縁部を外折するタイプが罌を断面三角形にして技法の省略を進める中、体部が直線的に立ち上がり、口縁部はほぼ水平に外折し、さらに端部を内側に折り曲げた形態（13・16）へ転化し、その大型品は罌をもち、小型品からは罌が失われる。一方口縁部が内傾するタイプは、端部を肥厚させ、または薄い器壁をのばして中世Ⅴ期をむかえる。

中世Ⅴ期は口縁部を外折するタイプが復活し、扁平した球胴に短い罌の付く茶釜形として、大和以外の京都・大坂など諸都市へも流通する。また26にみられるような瓦器釜もみられる。

なお大和の場合骨臓器に利用された例が多く、元興寺・古市城〔奈良市教育委員会1981〕などの調査ではその墨書から実年代を推定する手がかりを得ている。

煮炊具では、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ期に変化期が与えられよう。

その他、池殿奥支群南平坦面〔奈良県立橿考研1985〕から伊勢系の鍋が出土し、元興寺旧境内東北隅では〔奈良県立橿考研1977〕、13世紀代とされる完形の土師器皿を多量に包含した1.4~1.7mの三角形の土坑（SK012）がみつまっている。中には「聞」の字とともに底部外面に草花が描かれているものもある。また野山遺跡群〔奈良県立橿考研1989〕、布留遺跡〔埋蔵文化財天理教調査団1985〕の15世紀代の土師器皿には、底部に1~4カ所の穿孔のみられるものがあり、民俗例として、橿原市の浄国寺の大日堂の正面の鴨居に素焼きの灯明皿の穴をあけたものがあり、錐先を通して突き刺す例、京都府相楽郡海住山寺の参道に灯明皿に孔を穿ち1mほどの棒に突きさす例が報告されている。

さらに平城京右京七条一坊十五坪の調査 第97次 SE11から「湯屋□延久参年四月十日」の墨書曲物と11世紀末土器が〔奈良市教育委員会1987〕、東大寺旧境内発掘調査報告 SK02から山茶碗・石鍋が〔奈良市教育委員会1980〕、平城京左京三条六坊五坪第269次 SE03（13世紀中）から石鍋が〔奈良市教育委員会1993〕、郡山城跡緑郭地区からは合口羽釜と土師器皿が出土し、羽釜の中から土師器皿が3枚、このうち1枚は片口状で内側に粘土がこびりつき米粒の痕跡が見られる〔奈良県立橿考研1989〕。高取町佐田遺跡群では土釜と土師器皿を組み合わせた7カ所の土器埋納遺構がみられ、一部の土師器皿には煤が付着していた〔奈良県立橿考研1984〕。

一方元興寺旧境内第6~9次の調査 SE08（12世紀初頭）から箸・匙・曲物・折敷・下駄など出土〔奈良市教育委員会1987〕。野山支群 ST-05〔奈良県立橿考研1985〕からは蓋物と推定される蒔絵片が出土している。口径は推定14cmである。文様は器表のほぼ全面に施され、菊花を中央にはさみ対の蝶が描かれている。時期は文様から13世紀前半以前と考えられている。さらに北野腰越遺跡 SE01〔奈良県立橿考研1992〕では漆塗りの曲物もみられる。

⑤……………紀伊(和歌山)

食 膳 具

平安時代後期以降の土器については、武内雅人の整理が詳しい〔武内1984・1986〕。古代後Ⅲ期の資料として鳴神地区遺跡の資料をみると、その構成は黒色土器 A 類碗(3)・B 類碗, 土師器碗(1・2)・皿および緑釉・灰釉陶器とされる。またこれらの土器類は、成形技法に関して「口縁部外面に数段の、1 回毎に完結した凹凸を残す「多段横ナデ技法」〔武内1984・1986〕を特徴としてもつことでも知られている。3 の黒色土器は内面に粗いヘラミガキを施し、外面は口縁部をヘラ削りした後、三段のくぼみを加えている。

この多段横ナデ技法は、特に武内のⅡ a 期において盛行し、黒色土器、土師器の別に関わらず碗の多くにみられるとされる。ただしこの技法も古代後Ⅲ期後半から中世Ⅰにかけて簡略化が進み、底部際に一段強く施される場合、または口縁部の横ナデにその痕跡をとどめるだけとなる。

中世Ⅰ期以降は瓦器碗と土師器皿の組み合わせが基本となり、渋谷高秀〔渋谷1984・1985a・1985b・1989・1991・1992〕・村田 弘〔村田1985・1988〕・佐伯和也〔佐伯1985〕等による整理が知られている。瓦器碗の編年研究は福琳寺遺跡〔和歌山県教育委員会1980〕、東家遺跡〔橋本市教育委員会1984〕などでおこなわれ、宇佐美の館跡との関連がうかがわれる東家遺跡では、遺物の定量分析とあわせて瓦器碗および内面にハケ調整を残す瓦器皿の編年を13世紀前半から15世紀まで試みている。なお西国分遺跡では紀ノ川中流域タイプの瓦器碗の胎土分析もおこなわれている〔岩出町教育委員会1983〕。

一方福琳寺遺跡出土の資料を中心とした瓦器碗の整理によれば、和歌山県内の初現的な瓦器碗は、鳴神地区遺跡のもっとも新しい段階の資料に見られ、口縁部内面に沈線を施し、底部外面には静止糸切り痕跡を残す。次いで西ノ庄遺跡の資料をみると、口縁部内面に沈線を持ち、底部内面には平行暗文が描かれるもので、口縁部外面には横ナデによる段が生じる。また高台は張り出しを失う。

中世Ⅱ期は粉河産土神社第2 経塚出土の資料(13)で、12世紀末の魚住窯播鉢と常滑窯壺と共伴している。中世Ⅲ期は外面にユビオサエによる凹凸が残り、関戸遺跡の資料によれば、法量の減少に加えて暗文は幅の広いもので、底部には螺旋暗文が描かれる。また中世後期前半に比定される垂井女房ヶ坪遺跡井戸の瓦器碗〔橋本市教育委員会1984〕は、口径13cm で口縁部に沈線をめぐらせ、内底面には連結輪状の暗文が、外面にもわずかにミガキが残るとされる。

そして中世Ⅲ期後半の根来寺坊院および鞆淵神社遺跡の資料は、高台が退化してその機能を失ったもの、および高台の消滅したもので、内面のミガキも僅かなものとなる。なおこの時期に併行していわゆるヘソ皿がみられるため、その年代は14世紀中頃におかれている〔和歌山県教育委員会1980〕。

中世Ⅲ期後半以降、瓦器碗は衰退し、代わって手捏ねによる京都系(31・36)、体部の立ち上がりが短い在地の京都型(27・29)および紀伊独自の土師器皿(26など)がみられ、根来寺などを代表として15世紀代に盛行する白土器とあわせて、土師器皿は多彩な構成となる。なお紀伊南部においてこの時期、山茶碗の搬入も認められている。

図9 紀伊(1)

圖10 紀伊(2)

煮 炊 具

基本的に、球形の体部上半に短い鏝をめぐらせ、口縁部を外反させた後、端部を上方または内側へつまみ上げる形態を軸とする。

古代後Ⅲ期は、口縁部を「く」字状に外折させる甕形鍋と、口縁部直下に鏝を付けた長胴形釜がみられる。

中世Ⅰ期の鍋もおそらくさきの甕形鍋の系譜をひくものと思われ、やや長胴ぎみの体部に短く外折する口縁部が付けられている。

中世Ⅰ期後半あるいはⅡ期において紀伊特有の釜が現れる。口縁端部のつまみ上げは、玉縁状のものから明瞭に屈曲して内側へ折り曲げられるもの、さらに中世Ⅳ期には外側へ端部が発達するものへ変化する。鏝は当初の段階では、短いものの明瞭に付けられているが、中世Ⅲ期以降はほとんど突帯状に省略が進み、Ⅲ期の鳥居遺跡SD 2 (10)など、その痕跡状のものあるいは鏝をもたない製品もあらわれる。これらは基本的な形態の共通性を伊勢とあわせることも可能と考える。

またこの時期には京都の鍋を意識した、口縁部を受け部状にした鍋もみえ、その系列は形態を変化させながら中世Ⅴ期までつづく。一方中世Ⅴ期には前代までの釜が衰退し、和泉・河内型の釜(18)および大和系と思われる瓦器釜(19)、さらに播磨型の土師器釜(16・17)が多く見られ、状況は一変する。なお根来寺坊院跡でみられる18世紀以降の焙烙は播磨系である。

画期としては中世Ⅰ期とⅣからⅤ期への段階にみとめられよう。

なおほかに、根来寺坊院跡 SE1001〔和歌山県文化財センター1988〕から中世Ⅲ期の魚住窯播鉢、土師器杯・皿とあわせて鉄釜と五徳が出土し、金剛峰寺遺跡〔和歌山県文化財センター1990〕からは石鍋および東海系播鉢と在地系播鉢が出土。東大人遺跡〔御坊市遺跡調査会1983〕では中世Ⅰ～Ⅲ期の集落の変遷をみる事ができる。

また、東家遺跡における鎌倉時代～室町時代の破片数は、瓦器碗2467、土器碗4、瀬戸美濃窯系天目碗2、灰釉碗3、中国製天目碗1、青磁碗19、白磁碗7、染付碗2、瓦器皿30、土師器皿119、瀬戸美濃窯系灰釉皿5、青磁皿2、須恵器播鉢7、瓦器播鉢15、土師器播鉢5、備前窯播鉢12、須恵器甕1、瓦器甕17、土師器甕3、常滑窯甕25、備前窯甕25、備前窯壺2、褐釉壺1、土師器釜7、土師器鍋27、瓦器釜4であった。

⑥……………和泉・中南河内(大阪中南部)**食 膳 具**

尾上実〔尾上1983〕による瓦器碗の整理をはじめとして、橋本久和〔橋本1980〕、森村健一〔森村1981〕、鋤柄俊夫〔鋤柄1988b〕、森島康雄〔森島1988・1992〕、近江俊秀〔近江1989〕および長原遺跡、若江遺跡、大和川今池遺跡などの調査によって編年案がだされている。

古代後Ⅲ期は黒色土器 A 類碗・B 類碗、瓦器碗、土師器杯・碗・皿から構成される。黒色土器は、低く小さな高台の付いた杯型の A 類から、高く外に張った高台と胴部の彎曲した A 類および、口縁部の外反する B 類へ変化する。瓦器碗の最古段階の形態へつながる。

日置荘遺跡ではこの黒色土器と瓦器碗が井戸から同時に出土しており、当地域におけるこの時期の変化の様相を知ることができる。土師器杯および碗は河内を中心に分布するものであり、口縁部

图11 中河内·和泉(1)

のヨコナデと体部の指押さえを特徴とする。また東日本でみられる足高高台付き杯に類した製品がみられるのもこの時期である。

皿は京都型(5)と前代以来の系譜を引く在地型(7)に分かれ、和泉はより在地色が強い。ただし前者においても、(5)のように直接京都型の影響をみるもの以外に、(6)・(8)など、浅く外反した器形にその影響をみることが出来るものもある。

中世Ⅰ～Ⅲ期、この地域は瓦器碗を中心とした構成となり、土師器皿はあまりめだたない。土師器皿は、河内においては、体部の立ち上がりとⅢ期にみられる口縁部のつまみ上げの形状により京都との関係をうかがうこともできるが、和泉においてはいずれも外上方へ開く体部をもち、手捏ねではあるが在地型として京都の影響をみることはできない。

中世Ⅳ期以降は、若江城などの城館跡および堺環濠都市遺跡の資料が中心となる。土師器皿はほとんどが京都を意識した形態をもち、その組み合わせについても同様な傾向を示す。

煮炊具

広瀬和雄〔広瀬1981〕、菅原正明〔菅原1983・1989〕、高田秀樹〔高田1979〕、樋口吉文〔樋口1978〕、土山健史〔土山1989〕、渋谷高秀〔渋谷1989〕、森島康雄〔森島1990〕、鋤柄俊夫〔鋤柄1988a・1988b・1989・1995〕および、堺環濠都市遺跡、山直中遺跡、平井遺跡、箕土路遺跡などにより分類の検討と年代比定が試みられている。

古代後Ⅲ期は、土師器で球胴型の罍釜、甕、および長胴型の罍甕から構成される。中世Ⅰ期には球胴型の釜が頸部を「く」字状に屈曲させ、口縁部の断面を方形から丸みを帯びた形態に転化させる。中世Ⅱ期は口縁部の外折が短くなる。一般に罍部は球状の胴部中位よりやや上半につけられ、口縁部は内傾する頸部から短く外折する。

中世Ⅲ期はこれまでつづいた口縁部形態の変化が、玉縁状になって終息し、同時に瓦質焼成の製品で同様の器形のものとの交錯がみられる。罍部は断面形が丸いものに対して下面を水平に設置した隅丸方形のものがみられ、それが瓦器釜への連続性をうかがわせている。さらにこの段階において瓦質焼成の製品の中には、内傾する頸部に段を設けるものもみられる。

中世Ⅳ期は瓦器釜の盛行期である。基本的な成形は粘土紐巻き上げによるものと推定するが、底部の丸底成形は工程の段階が不明である。調整は時期により異なるが、体部内面は横位の刷毛調整または不定方向のナデ、口縁部内面は体部より粗い横位の刷毛調整であり、口縁部内面のみ刷毛をナデ消す調整が加えられる。外面は罍部を貼付けた後、おそらく吸熱の効率を高めるべく胴部を薄く横位のケズリで調整し、それは、不定方向のケズリとあわせ、外面全体に及んでいる。以下口縁部形態を中心とした分類を行う。

この時期の瓦器釜は頸部の特徴から頸部が内傾して外面に段を有するものと、端面を水平に仕上げるものの2群にわけられる。前者は体部が緩やかに内彎して立ち上がり、水平または上彎気味に短い罍が付く。罍端部は断面が隅丸方形を呈し、やや上端部の発達がうかがわれる資料もある。後者の典型的な資料としては、口縁部がヨコナデにより内外方向に発達し、または内方向への発達かわりに直上方向に仕上げられ大小の区分も明瞭に認められる。胎土は水籤された緻密なものであり、焼成も良好な製品が多い。

なお、いずれも口縁部は内彎の形態から直立したものへと変化し、外面の段はそれに対応して緩やかなものさらに沈線となっていく。

图12 中河内·和泉(2)

中世Ⅴ期の釜は酸化焰により、色調は明黄色または灰黄色を呈し、いわゆる土師質の範疇にはいる。また、胎土も砂粒を含んだ粗いものが多い。頸部は直線的に立ち上がり、外面の段は弱く、浅い凹凸は沈線状の外観を呈するものもみられる。

口縁部は細部の特徴から、端面が丸みを帯びるもの、水平の端面が横ナデにより凹線状に仕上げられるもの、または内傾して成形され外端部がつまみあげのかたちで尖りぎみに仕上げられるものに分けられる。また、調整に関して口縁部内面のナデ消しが省略されるものも認められる。

なおこの時期の後半において、堺環濠都市遺跡、大坂城跡などで播磨型の鍋が少量みられるが、この地域では、この時期まで土製煮炊具は釜だけで供されていたことになる。

⑦……………北河内・摂津北東部(大阪北部)

土器碗を中心とした橋本久和〔高槻市教育委員会1980〕〔橋本1980〕・宇治田和生〔宇治田1991〕による整理が知られる。古代後Ⅲ期は黒色土器碗、土師器杯・皿および長胴型罍甕と、口縁部を「く」字状に外折させた長胴・短胴の甕または鍋から構成される。黒色土器碗は杯形から碗形へ変化し、土師器杯・皿は手捏ね成形の在来系土器であるが、平城京以来の杯形の延長上にあると思われる一群(3・4)と京都型の一類(5・7)がみられる。

中世Ⅰ期には楠葉型瓦器碗が現れ、和泉型瓦器碗とあわせてこの地域の土器食膳具の主体をなす。またこの時期は、楠葉型瓦器碗が西日本のいくつかの遠隔地でみられる時期としても知られている。

一方土師器皿は調整・形態共に典型的な京都型の範疇に入るとは言えず、煮炊具についても不明な部分が多い。中世Ⅱ期においてもこの状況は続き、煮炊具は釜を多く見ることができ、その形態で直接京都に対比できるものは少ない。

中世Ⅲ期は瓦器碗が衰退する一方で、鎌倉・草戸千軒町遺跡などへ運ばれる輪花形の瓦器杯がみられ、煮炊具についても頸部の内傾する在来品の製品(15・16)に加えて、京都型の釜(12・18)がみられる。中世Ⅳ期以降は、瓦器碗が消滅し、食膳具はこの時期になって明瞭に京都型を意識した土師器皿のみとなる。煮炊具については資料が少ないため、淀川河床遺跡の資料を引用すれば〔河上ほか1993〕、やはり中世Ⅲ期以降で京都型瓦器鍋が認められ、それらの供給源についての検討は残るものの、おおむね京都型の製品が地域の需要に応じていたものと考えておきたい。

⑧……………摂津西部(兵庫東部)

食膳具

古代後Ⅲ期は手捏ね成形の土師器皿(1・2)、須恵器杯(5・6)・疑似高台形の杯(7・8)・高台付き杯、高台付き碗(3)、黒色土器A類碗(4)から構成される。須恵器のうち高台付き杯はいわゆる足高高台杯の範疇に捉えられるものと考えられ、疑似高台杯と合わせて体部の直線的な形態をとる。一方3・6などはいわゆる碗形態をとっており、同じ須恵器でありながら系統の違いをみることができる。

中世Ⅰ・Ⅱ期は対中遺跡で土師器・瓦器・黒色土器の分類と編年がおこなわれている〔兵庫県教育委員会1988〕。対中遺跡は三田市に所在する平安時代から鎌倉時代の大型集落遺跡であり、土師器

图13 北摄津·北河内(1)

図14 北摂・北河内(2)

图15 西長津(1)

皿、底部糸切り瓦器碗、播磨系須恵器碗、播磨系甕、石鍋転用温石（ほかに福田天神・宝林寺北、揖保郡太子町前山、宍粟郡山崎町菅野遺跡）、疑似高台皿、平高台黒色土器など、出土遺物は多岐におよぶ。

このうち瓦器碗は丹波型瓦器碗のバリエーションの一類型としてとらえられ、その特徴は、器高指数が35～41の深い形で、口縁部に横ナデが施されることによって外面に明瞭な段が認められ、内面に沈線はみられない。また器壁は比較的厚く、内底面のミガキは格子文で、螺旋文はないとされる。

また別に東奥1号墳、丹波三ツ塚遺跡など氷上郡に分布する平高台の瓦器碗もみられ、丹後地域でみられる同様な平高台の黒色土器との関連が検討されている。時期は12世紀前半とされる。

土師器皿は手捏ね成形と糸切りロクロ成形の両者がみられ、前者は京都型、後者は須恵器系の杯形および疑似高台形が中世Ⅱ期前半までみられる。京都型の皿はいわゆる2段ナデから1段ナデへ、口縁部の断面が方形から面取りを経て半球形に省略が進む段階まで、比較的忠実に模倣している。ロクロ成形の製品は、中世Ⅰ期前半で体部中位が屈曲し、その後、器高が減少して体部の傾きも緩やかになる。なおこの遺跡での両者の比率はおおむね1：1とされている。

またやはり三田市の集落遺跡である川除・藤ノ木遺跡〔兵庫県教育委員会1992〕でも中世Ⅰ期以降の土器・陶磁器などについて整理がおこなわれ、出土遺物の編年・定量および集落の変遷が示されている。

中世Ⅳ期以降は再び京都型の皿が盛行し、ほかの土器類はみられない。

煮炊具

古代後Ⅲ期から中世前半において、播磨と同様な構成と変遷を示すが、中世後半は畿内的な色彩を強める。古代後Ⅲ期は前代からの系譜をひく球胴型で、口縁部の外折した小型甕型の鍋と口縁部直下に鏝を設けた長胴の甕がみられる。

中世Ⅰ期は前代の組み合わせに加えて、球胴で口縁の広い鍋がみられる。この製品は口縁部内面と体部外面にハケ調整が施されており、中世Ⅱ期以降顕著となる外面叩き調整の鍋とは系譜を異にする。中世Ⅲ期は前代までみられた長胴の鏝甕形釜が消え、短胴の釜が現れる。鏝は口縁部直下から下がり、外面には叩き調整が施される。

中世Ⅳ期以降は叩き成形の鍋が減少する一方で、河内・和泉地域と類似した釜がみられる。焼成は土師質または瓦質である。頸部は内傾し、外面に2～3の段あるいは凹線をつける。胴部外面はヘラ削り、内面はハケ調整が施される。大量に出土する事も含めて、多くの点で河内・和泉地域の釜と類似しているが、焼成の点において、外面に炭素を吸着させてはいるが、土師質に近い焼成をみせる点で区別の可能な部分はある。

このように摂津西部は、播磨の須恵器もみられるものの、基本的には京都型土師器皿を軸とした地域であり、瓦器碗も比較的多く受容している。さらに中世Ⅴ期においては京都型の土師器皿と河内・和泉型の土釜の組み合わせによる特異な地域性も示している。

なお定量分析としては、川除・藤ノ木遺跡以外に、淡河萩原遺跡〔淡神文化財協会・萩原遺跡調査団1992〕のSD01（12世紀末～13世紀）が、個体数で、土師器皿14、須恵器皿15、瓦器皿1、土師器碗10、須恵器碗12、磁器碗5、瓦器碗2、鉢1を数え、三条岡山遺跡〔芦屋市教育委員会1979〕では供膳・調理・煮炊の比率が4：1：1あるいは5：1：2と言われる。

図16 西摂津(2)

⑨……………丹波(京都中西部)

これまで山本三郎〔山本1976〕・伊野近富〔伊野1985・1995〕・水谷寿克・石井清司〔水谷・石井1986〕・種定淳介〔種定1989〕らおよび、初田館跡の調査によって整理が進められてきた。古代後Ⅲ期は、青野南遺跡の土師器杯が知られる。外見を高台付き皿に模した疑似高台状の杯である。体部は平らな底部からつよく屈曲して外上方へ開く。

中世Ⅰ期は播磨系須恵器碗，瓦器碗，土師器皿・鍋・釜および金井畑遺跡排水路トレンチPIT17〔丹南町教育委員会1992〕などでは11世紀後半代の，長遺跡〔綾部市教育委員会1995〕では12世紀の黒色土器が出土している。

瓦器碗はいわゆる「丹波型」と称されるもので，大型の集落遺跡である多利遺跡群でおこなわれた瓦器碗の整理によると〔兵庫県教育委員会1987〕，その特徴は口縁部外面の調整にあるとされる。すなわち，中世Ⅰ期では口縁端部内面に沈線がはしり，外面には強い横ナデにより2段のくぼみがみられる。それが2段から1段に減少し，次の段階では口縁部が内傾するようになる。そしてその次の段階ではこの巻き込みが失われ，さらに全体に法量が減少し，中世Ⅲ期には高台の退化も進む。

このような傾向は，暗文・ミガキの施し方・口縁部の調整において，京都・兵庫にかかわらない丹波で共通する状況と言われているが，器形においては，口縁部外面に屈曲を付けたり，器高が低い点など多利遺跡独特の状況がみられる部分もあるとされ，同様な特徴は国領遺跡〔兵庫県教育委員会1991〕でもみられている。

しかし，多紀郡の初田館〔兵庫県教育委員会1992〕では，器壁の厚い，器高の高い京都丹波型の瓦器碗が，一方大山荘荘園内〔丹南町教育委員会1992〕では両方の特徴をもった瓦器碗が出土するなど，遺跡の個性と地域性によって，同じ丹波であってもその様相はいくつかに整理する必要があるとされている〔兵庫県教育委員会1987〕。なお，柏原町の東奥第1号墳では底部糸切りの瓦器碗も出土している〔兵庫県教育委員会1987〕。

煮炊具は釜・足釜なども出土するが，基本的には土師器鍋を軸とし，丸みのある体部から短い口縁部を外上方へ屈曲させるものがみられる。

中世Ⅱ期は大内城跡に代表される。構成は瓦器碗，土師器皿，土師器鍋であり，鍋は膨らみのある体部に受け部状の口縁部が付く。内外面ハケ調整が施される。瓦器碗は口縁部外面の段が1段あるいは消滅し，口縁端部が内傾する。

中世Ⅲ期は瓦器碗が衰退する一方で煮炊具に新しい資料が出現する。中世Ⅰ期でみられた口縁部を外折させる釜以外に，口縁部を内傾させる釜などバラエティーに富んでいるが，さらに球胴で外面に叩きを施した鍋がこの時期の後半以降みられる。その主要生産地は隣接する播磨と考えられるが，当地域においても中世後半の煮炊具はこの製品が多くみられ，近世の焙烙においてもこの製品の系譜をひくものとなっている。

图17 丹波

図18 丹 後

⑩……………丹後(京都北部)

竹原一彦〔竹原1987〕・伊野近富〔伊野1985〕・松村英之〔松村1995〕による黒色土器の分類と編年研究がある。古代後Ⅲ期は竹原の黒色土器Ⅰ型式(10世紀末から11世紀前半)をその後半におく。体部は中位で屈曲し、口縁部はわずかに外反する。底部は疑似高台状を呈し、底部切り離しは回転糸切りによる。内外面共に丁寧なミガキが施されている。

中世Ⅰ期はおおむね黒色土器のⅡ型式に対応する。体部は中位の屈曲が失われ、全体に内彎して立ち上がり、その後半には器高が減少し、体部は広く外上方に開く。底部の疑似高台は低く、省略が進む。ミガキについても同様な傾向が認められ、体部外面は上半部に施される。

中世Ⅱ期には疑似高台形が失われる。体部は内彎して立ち上がり、口縁部のみ外反し、丸みを帯びて仕上げられる。また13世紀前半代とされるその末期においては、器高はさらに減少し、体部は直線的で外上方に開く。また外面のミガキは口縁部に粗くほどこされるようになる。

一方皿類は、平らな底部と短く直立する体部から形成されるもので、一般に古代以来の系譜をひく形態に類似する。特に京都を意識したものは見受けられない。また杯は、古代後Ⅲ期で疑似高台状の底部から屈曲して外上方へ立ち上がる、この時期に通有な形態がみられる。

煮炊具は大山墳墓群の資料(12)の中にみられる〔丹後町教育委員会1983〕。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部で弱く外折するか、または浅い受け部状に屈曲し、端部は尖り気味に仕上げられる。内外面共ハケ調整が施される。ほかに口縁部を強く外折させた丸胴型の鍋もみられるが、その全体形は明かとなっていない。

なお、同様な鍋は、桜内遺跡 SE01〔京都府埋蔵文化財センター1993〕からも出土し、いずれも白磁碗、東播系播鉢、黒色土器の年代から、12世紀後半から13世紀前半に比定できる。また日光寺遺跡 SP111〔京都府埋蔵文化財センター1990〕からは、12世紀末から13世紀の東播系播鉢と共伴して土師器鍋(13)が出土している。口縁部が段をもち、受け部状を呈するもので、体部は直線的に立ち上がる。このうち当地域の特徴を示すと思われる製品は前者で、京都型に近い受け部状口縁の鍋とは別に、福井遺跡の中世墓などから同系列と考えられる鍋(17)が出土している〔加悦町教育委員会1980〕。

なお林遺跡2号溝からはほぼ完形の土師器皿9枚と共に土師器釜(19)が出土した〔網野町教育委員会1977〕。京都型の製品である。また、中野遺跡からは、Ⅲ期の土師器鍋・釜、瓦器釜のほか、石鍋が出土している〔宮津市教育委員会1981・1983〕。

(大阪府文化財調査研究センター、国立歴史民俗博物館共同研究員)

註

(1)——なお、〔近江八幡市教育委員会1984〕で14世紀から現代までの変遷が示されている。

引用・参考文献

芦屋市教育委員会 1979 〔三条岡山遺跡〕
綾部市教育委員会 1995 〔京都府綾部市文化財調査報告〕第21集

- 網野町教育委員会 1977 『林遺跡発掘調査報告書』
- 伊藤久嗣 1968 「元興寺極楽坊出土の羽蓋形土器」『元興寺仏教民俗資料研究所年報』第一冊
- 稲垣晋也 1960 「瓦器碗三例」『大和文化研究』第5巻5号
- 稲垣晋也 1961 「法隆寺出土の瓦器碗」『大和文化研究』第6巻4号
- 稲垣晋也 1962 「法隆寺出土資料による土釜の編年」『大和文化研究』第7巻7号
- 稲垣晋也 1963 「赤土器・白土器」『大和文化研究』第8巻2号
- 稲垣晋也 1968 「瓦器碗の成立と展開」『日本歴史考古学論叢』2
- 伊野近富 1985 「京都北部の中世土器について」『中近世土器の基礎研究』
- 伊野近富 1987 「「かわらけ」考」『京都府埋蔵文化財調査研究センター5周年記念論集』
- 伊野近富 1989 「12～16世紀の京都の土器」『中近世土器の基礎研究』V
- 伊野近富 1990 「中世土器の編年(上)」『京都府埋蔵文化財情報』第57号
- 今尾文昭 1990 「大和・中世村落における瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』VI
- 今尾文昭 1992 「花かたにやくなら火鉢・考」『考古学与生活文化』(同志社大学考古学シリーズV)
- 岩出町教育委員会 1983 『西国分Ⅱ遺跡発掘調査概報』
- 宇治田和生 1991 「河内国・楠葉牧における土器生産の展開」『ヒストリア』第133号
- 近江俊秀・岡田清一 1989 「河内中南部における古代末期から中世の土器の諸問題」『八尾市文化財紀要』4
- 近江俊秀 1990 「黒色土器から瓦器へ」『中近世土器の基礎研究』VI
- 近江俊秀 1990 「大和地方出土の瓦器碗とその生産について」『考古学論叢』第14冊
- 近江俊秀 1991 「大和型瓦器碗の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号
- 近江俊秀 1992a 「畿内産瓦器碗に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究』VII
- 近江俊秀 1992b 「大和における中世後期の在来系土器」『北野腰越遺跡』
- 近江俊秀 1994 「大和瓦質摺鉢考」『研究紀要』第2集
- 近江八幡市教育委員会 1984 「堀上遺跡 余内遺跡 堂ノ内遺跡」(近江八幡市埋蔵文化財調査報告書Ⅲ)
- 尾上 実 1983 「南河内の瓦器碗」『古文化論叢』
- 加悦町教育委員会 1980 『金屋比丘尼遺跡発掘調査報告書』
- 河上晋作ほか 1993 「淀川・木津川河床の採集資料」『中近世土器の基礎研究』IX
- 川口宏海 1990 「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』VI
- 川越俊一 1983 「大和地方出土の瓦器をめぐる2, 3の問題」『文化財論叢』ほか
- 北野隆亮 1991 「中世末期の瓦質碗・皿についての覚書」『関西近世考古学研究』II
- 木戸雅寿 1989 「近江における15～16世紀の土器について」『中近世土器の基礎研究』V
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993 『京都府遺跡調査概報』第54冊
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990 『京都府遺跡調査概報』第37冊
- 御坊市遺跡調査会 1983 「東大人遺跡」
- 佐伯和也 1985 「瓦器碗消滅以後の土師器皿の一樣相」『和歌山県埋蔵文化財情報』17
- 渋谷高秀 1984 「野田地区遺跡整理報告」『和歌山県埋蔵文化財情報』16
- 渋谷高秀 1985 「紀伊の中世土器」『中近世土器の基礎研究』
- 渋谷高秀 1985 「紀伊 11～14世紀代 日常雑器の編年」『和歌山県埋蔵文化財情報』17
- 渋谷高秀 1989 「和泉国における土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』V
- 渋谷高秀 1991 「瓦質土器出現期の地域性」『考古学研究』第38巻第3号
- 渋谷高秀 1992 「和歌山県の中世土器」『大和の中世土器』II
- 白石太一郎 1969 「いわゆる瓦器に関する2・3の問題」『古代学研究』54ほか
- 菅原正明 1983 「畿内における土釜の生産と流通」『文化財論叢』
- 菅原正明 1989 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集
- 鋤柄俊夫 1988a 「大阪府下における中世後期の土器」『摂河泉文化資料』第40号 摂河泉文庫
- 鋤柄俊夫 1988b 「畿内における古代末から中世の土器—模倣系土器生産の展開—」『中近世土器の基礎研究』IV
- 鋤柄俊夫 1989 「大阪府南部の瓦質土器生産(2)」『中近世土器の基礎研究』V
- 鋤柄俊夫 1994 「平安京出土土師器皿の諸問題」『平安京出土土器の研究』(古代学研究所研究報告第4輯)
- 鋤柄俊夫 1995 「大阪府南部の瓦質土器生産(1)」『日置荘遺跡』大阪文化財センター
- 高田秀樹 1979 「羽蓋形土器について」『美原町遺跡発掘調査概要報告書』元興寺文化財研究所
- 高槻市教育委員会 1980 『上牧遺跡発掘調査報告書』
- 武内雅人 1984 「古代末期紀伊国の土器様相」『考古学研究』第31巻第1号
- 武内雅人 1986 「和歌山県における9～11世紀の土器」『中近世土器の基礎研究』II
- 竹田政敬 1987 「宇陀における瓦器についての覚書」『能峠遺跡群』II 奈良県立橿原考古学研究所
- 竹原一彦 1987 「丹後における黒色土器について」『京都府埋蔵文化財論叢』第1集
- 立石堅志 1989 「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究』V

- 田中 琢 1967 「古代・中世窯業の地域的特質(4)畿内」『日本の考古学』Ⅵ
種定淳介 1989 「丹波・中山窯跡出土の須恵器」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ
丹後町教育委員会 1983 「丹後大山墳墓群」
淡神文化財協会・萩原遺跡調査団 1992 「淡河萩原遺跡発掘調査報告書(Ⅰ)」
丹南町教育委員会 1992 「大山荘内埋蔵文化財調査概要報告書」
土山健史 1989 「堺環濠都市遺跡における15・16世紀の在出土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ
坪之内徹 1990 「中世南部の瓦器・瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ
天理市教育委員会 1988 「在原遺跡」『天理市埋蔵文化財調査概報 昭和61・62年度』
中井一夫 1988 「焼きムラの観察より見た瓦器窯の推定」『橿原考古学研究所論集』10
名張市遺跡調査会 1986 「滝野氏城址」
奈良県立橿原考古学研究所 1977 「奈良県遺跡調査概報 1976年度」
奈良県立橿原考古学研究所 1984 「奈良県遺跡調査概報 1983年度」
奈良県立橿原考古学研究所 1989 「奈良県遺跡調査概報 1986年度」
奈良県立橿原考古学研究所 1985 「野山遺跡群」Ⅰ
奈良県立橿原考古学研究所 1989 榛原町 「野山遺跡群」Ⅱ
奈良県立橿原考古学研究所 1992 「北野腰越遺跡」
奈良市教育委員会 1980 「奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度」
奈良市教育委員会 1981 「古市城跡発掘調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告 昭和55年度』
奈良市教育委員会 1993 「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度」
奈良市教育委員会 1987a 「奈良市埋蔵文化財調査報告 昭和60年度」
奈良市教育委員会 1987b 「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」
橋本市教育委員会 1984 「東家遺跡発掘調査概報」
橋本久和 1980 「中世土器の地域性と流通」『考古学研究』第26巻 第4号ほか
橋本久和 1986 「畿内の黒色土器(1)」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ
樋口吉文 1978 「新金岡町所在遺跡発掘調査抄報」堺市教育委員会
兵庫県教育委員会 1987 「多利遺跡群発掘調査報告」
兵庫県教育委員会 1988 「対中」
兵庫県教育委員会 1991 「国領遺跡発掘調査報告書」
兵庫県教育委員会 1992 「川除・藤ノ木遺跡」
兵庫県教育委員会 1992 「初田館跡」
広瀬和雄 1981 「大園遺跡発掘調査概要」Ⅴ 大阪府教育委員会
堀内明博 1986 「平安時代中・後期の畿内の土器組成(1)」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ
埋蔵文化財天理教調査団 1985 「布留遺跡 布留(西小路)地区出土の中世土器」
松村英之 1995 「中世土器の諸問題」『岡岡田古墳』加悦町教育委員会
三重県教育委員会 1982 「昭和56年度県営園場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」
三重県教育委員会 1984 「昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」
三重県教育委員会 1990 「平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」
三重県教育委員会 1991 「森脇遺跡(第3次)発掘調査報告」
三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991 「平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告
-第3分冊-」
水谷寿克・石井清司 1986 「篠窯跡群について」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ
宮津市教育委員会 1981 「中野遺跡第2次発掘調査概要」
宮津市教育委員会 1983 「中野遺跡第4次発掘調査概要」
村田 弘 1985 「根来寺における白土器の消長」『和歌山県埋蔵文化財情報』17
村田 弘 1988 「紀伊国における中世土師質皿の法量変化について」『巽三郎先生古希記念論集 求道能道』
森 隆 1986 「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ
森 隆 1988 「近江地域出土の古代末期の土器群について」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ
森 隆 1992 「近江出土の瓦器碗に関する若干の考察」『大和の中世土器』Ⅱ
森下恵介 1987 「黒い器」『花園史学』第8号
森下恵介・立石堅志 1986 「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』
森島康雄 1988 「瓦器碗の分布状況の変化と生産の流通」『摂河泉文化資料』第40号 摂河泉文庫
森島康雄 1990 「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ
森島康雄 1992 「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ
森村健一 1981 「第2節 堺市内出土黒色土器について」『堺環濠都市遺跡』(堺市文化財調査報告第7集)
山田 猛 1986 「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ

- 大和古中近研究会 1991 『大和の中世土器』
 大和古中近研究会 1992 『大和の中世土器』Ⅱ
 山本三郎 1976 「丹波出土の土器について」『兵庫考古』第4号
 和歌山県教育委員会 1980 「紀の川用水建設事業に伴う発掘調査報告書」Ⅱ
 和歌山県文化財センター 1988 「根来寺坊院跡」
 和歌山県文化財センター 1990 「金剛峯寺遺跡」
 和気清章 1992 「伊勢・伊賀における中世土器の様相」『大和の中世土器』Ⅱ

挿図文献

伊賀

- ①三重県教育委員会・埋蔵文化財センター 1990 『平成元年度 農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊』
 ②三重県教育委員会・埋蔵文化財センター 1991 『森遺跡(第3次)発掘調査報告』
 ③三重県教育委員会・埋蔵文化財センター 1991 『平成2年度 農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 第3分冊』
 ④三重県教育委員会 1992 『北堀池遺跡発掘調査報告 第2分冊』
 ⑤山田 猛 1986 「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ
 ⑥名張市教育委員会 1982 『原出遺跡』
 ⑦三重県教育委員会 1984 『昭和58年度 農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
 ⑧三重県教育委員会 1986 『下郡遺跡発掘調査報告 第7次』
 ⑨三重県教育委員会 1983 『昭和57年度 農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』
 ⑩名張市遺跡調査会 1991 『名張都市計画事業中央東土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
 ⑪阿山町教育委員会・遺跡調査会 1987 『菊永氏城跡発掘調査報告』
 ⑫名張市遺跡調査会 1991 『糸川橋遺跡』

近江

- ⑬森 隆 1986 「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ
 ⑭能登川町教育委員会 1992 『能登川町埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集
 ⑮野州町教育委員会 1991 『野州町埋蔵文化財発掘調査集報』Ⅰ
 ⑯森 隆 1988 「近江地域出土の古代末期の土器群について」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ
 ⑰中主町教育委員会 1992 『平成2年度中主町内遺跡発掘調査年報』
 ⑱中主町教育委員会 1993 『県道野州中主線関連発掘調査報告書』
 ⑲滋賀県教育委員会 1989 『堂田・市子遺跡(2)』
 ⑳滋賀県教育委員会 1990 『金剛寺・後川遺跡発掘調査報告書』Ⅰ
 ㉑滋賀県教育委員会 1990 『大手前遺跡・上下遺跡』
 ㉒中主町教育委員会 1992 『平成2年度 中主町内遺跡発掘調査年報』
 ㉓野州町教育委員会 1990 『平成元年度 野州町内遺跡発掘調査概要』
 ㉔野州町教育委員会 1984 『昭和58年度 野州町遺跡群発掘調査概要』
 ㉕中主町教育委員会 1994 『平成4年度 中主町内遺跡発掘調査年報』
 ㉖野州町教育委員会 1988 『昭和60年度 野州町埋蔵文化財調査年報』
 ㉗能登川町教育委員会 1987 『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第8集
 ㉘滋賀県教育委員会 1989 『宇曾川災害復旧助成事業に伴う妙楽寺遺跡』Ⅲ
 ㉙中主町教育委員会 1984 『中主町文化財調査報告』第2集
 ㉚滋賀県教育委員会 1988 『敏満寺遺跡発掘調査報告書』
 ㉛滋賀県教育委員会 1985 『妙楽寺遺跡』Ⅱ
 ㉜中主町教育委員会 1993 『平成4年度 中主町埋蔵文化財発掘調査集報』Ⅰ
 ㉝野州町教育委員会 1990 『下々塚遺跡発掘調査報告』Ⅰ
 ㉞滋賀県教育委員会 1990 『高木遺跡・後川遺跡』
 ㉟能登川町教育委員会 1991 『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第20集
 ㊱野州町教育委員会 1988 『街道遺跡発掘調査報告』Ⅰ
 ㊲野州町教育委員会 1992 『平成3年度 野州町内遺跡発掘調査概要』
 ㊳滋賀県教育委員会 1992 『欲賀遺跡発掘調査報告書』
 ㊴木戸雅寿 1989 「近江における15～16世紀の土器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ

京都

- ①鋤柄俊夫 1988 「畿内における古代末から中世の土器—模倣系土器生産の展開—」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ
 ②(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978 『平安京跡発掘調査概要』
 ③平安京調査会 1975 『平安京跡発掘調査報告書』

-
- ④京都市文化観光局 1980 『平安京跡発掘調査概要』
 - ⑤京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1979 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅰ
 - ⑥京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅱ
 - ⑦京都大学埋蔵文化財センター 1978 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
 - ⑧(財)古代学協会 1984 『平安京左京三条三坊十一町』(平安京跡研究調査報告第14輯)
 - ⑨(財)古代学協会 1986 『平安京左京六条二坊六町』(平安京跡研究調査報告第17輯)
 - ⑩(財)古代学協会 1985 『平安京左京八条三坊二町 第2次調査』(平安京跡研究調査報告第16輯)
 - ⑪京都大学埋蔵文化財センター 1980 『京都大学構内遺跡調査研究年報』
 - ⑫(財)古代学協会 1983 『平安京左京八条三坊二町』(平安京跡研究調査報告第6輯)
 - ⑬京都市文化観光局 1988 『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』

大和

- ①奈良市教育委員会 1994 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』
- ②奈良市教育委員会 1984 『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』
- ③奈良市教育委員会 1987 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和61年度』
- ④奈良市教育委員会 1992 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』
- ⑤奈良市教育委員会 1982 『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度』
- ⑥奈良市教育委員会 1986 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和60年度』
- ⑦近江俊秀 1992 「畿内産瓦器椀に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ
- ⑧奈良市教育委員会 1981 『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和55年度』
- ⑨奈良市教育委員会 1983 『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和57年度』
- ⑩森下恵介・立石堅志 1986 「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』
- ⑪奈良県立権原考古学研究所 1985 『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)』1984年度
- ⑫奈良市教育委員会 1993 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』
- ⑬奈良女子大学 1985 『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅲ
- ⑭奈良県立権原考古学研究所 1986 『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)』1985年度
- ⑮奈良県立権原考古学研究所 1984 『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)』1983年度
- ⑯奈良県立権原考古学研究所 1980 『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)』1979年度
- ⑰奈良県立権原考古学研究所 1982 『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)』1981年度
- ⑱奈良女子大学 1984 『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅱ
- ⑲奈良女子大学 1989 『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅳ

紀伊

- ①武内雅人 1986 「和歌山県における9～11世紀の土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ
- ②渋谷高秀 1985 「紀伊, 11～14世紀代, 日常雑器の編年」『和歌山県埋蔵文化財情報』17
- ③和歌山県教育委員会 1980 「紀の川用水建設事業に伴う発掘調査報告書」Ⅱ
- ④(財)和歌山文化財センター 1991 『鳥居遺跡発掘調査概報』
- ⑤岩出町教育委員会 1993 『平成4年度 岩出町遺跡発掘調査概要』
- ⑥岩出町教育委員会 1994 『平成5年度 岩出町遺跡発掘調査概要』
- ⑦(財)和歌山文化財センター 1990 『金剛峯寺遺跡』
- ⑧御坊市遺跡調査会 1988 『広域営農団地農道整備事業に伴う岩内古墳群他埋蔵文化財発掘調査概報』
- ⑨橋本市教育委員会 1984 『東家遺跡発掘調査概報』
- ⑩渋谷高秀 1984 「野田地区遺跡整理報告」『和歌山県埋蔵文化財情報』16
- ⑪岩出町教育委員会 1983 『西国分Ⅱ遺跡発掘調査概報』
- ⑫(財)和歌山市文化体育振興事業団 1990 『木ノ本Ⅲ遺跡 第7次発掘調査報告書』
- ⑬和歌山市教育委員会 1992 『木ノ本遺跡 第3次発掘調査報告書』

和泉～河内中南部

- ①鋤柄俊夫 1988 「畿内における古代末から中世の土器—模倣系土器生産の展開—」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ
 - ②(財)大阪市文化財協会 1982 『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ, 1983 『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
 - ③大阪府教育委員会 1988 『平井遺跡』
 - ④尾上 実 1985 「大阪南部の中世土器」『中近世土器の基礎研究』
 - ⑤(財)東大阪市文化財協会 1993 『若江遺跡第38次発掘調査報告』
 - ⑥大阪府教育委員会 1988 『日置荘遺跡(その2)』
 - ⑦鋤柄俊夫 1989 「大阪府南部の瓦質土器生産(2)」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ
 - ⑧堺市教育委員会 1990 『堺市文化財調査報告』第34集
 - ⑨堺市教育委員会 1990 『堺市文化財調査報告』第51集
 - ⑩堺市教育委員会 1983 『堺市文化財調査報告』第15集
-

⑪堺市教育委員会 1989 『堺環濠都市遺跡発掘調査報告』

北摂津・河内北部

①寝屋川市教育委員会 1991 『高柳遺跡』

②橋本久和 1986 「畿内の黒色土器(1)」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ

③高槻市教育委員会 1980 『上牧遺跡発掘調査報告書』

④(財)枚方市文化財研究調査会 1987 『楠葉野田遺跡 現地説明会資料』

⑤菅原正明 1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』

西摂津

①兵庫県教育委員会 1988 『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』

②神戸市教育委員会 1981 『神楽遺跡発掘調査報告書』

③兵庫県教育委員会 1992 『川除・藤ノ木遺跡』

④兵庫県教育委員会 1988 『対中』

⑤芦屋市教育委員会 1979 『三条岡山遺跡』

⑥尼崎市教育委員会 1993 『尼崎遺跡』Ⅰ

③兵庫県教育委員会 1988 『芝崎遺跡』

丹波

①綾部市教育委員会 1983 『綾部市文化財調査報告書』第10集

②(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991 『京都府遺跡調査概報』第41冊

③(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 『京都府遺跡調査概報』第3冊

④(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 『京都府遺跡調査概報』第31冊

⑤(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992 『京都府遺跡調査概報』第16冊

⑥(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 『京都府遺跡調査概報』第22冊

⑦(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983 『京都府遺跡調査概報』第6冊

⑧(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 『京都府遺跡調査概報』第10冊

⑨福知山教育委員会 1993 『福知山市文化財調査報告書』第21集

⑩(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 『京都府遺跡調査概報』第27冊

丹後

①竹原一彦 1987 「丹後における黒色土器について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集

②(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991 『京都府遺跡調査概報』第43冊

③伊野近富 1985 「京都北部の中世土器について」『中近世土器の基礎研究』

④丹後町教育委員会 1983 『丹後大山墳墓群』

⑤(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993 『京都府遺跡調査概報』第54冊

⑥(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990 『京都府遺跡調査概報』第37冊

⑦網野町教育委員会 1977 『林遺跡発掘調査報告書』

⑧加悦町教育委員会 1980 『金屋比丘尼遺跡発掘調査報告書』